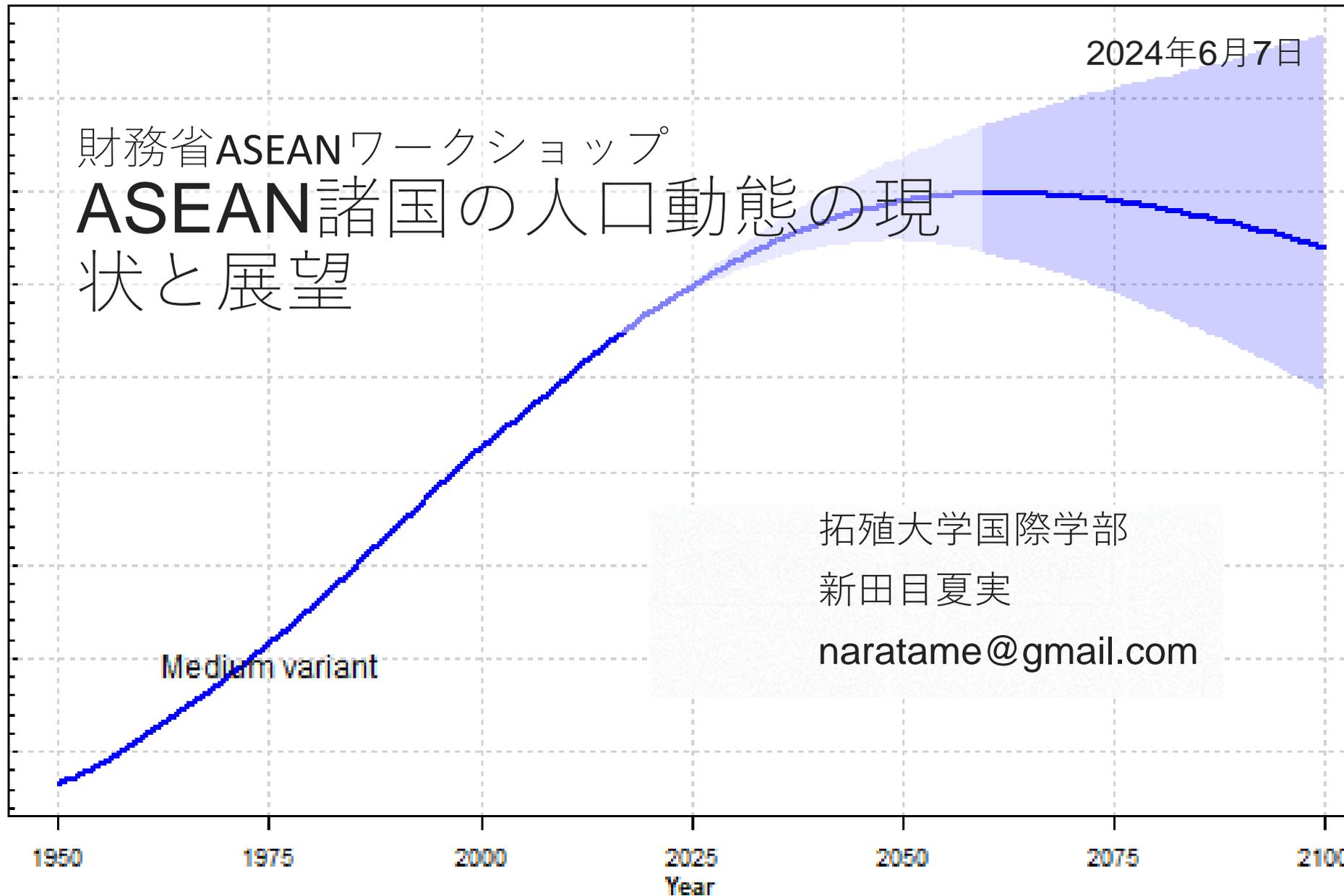


South-Eastern Asia: Total population

2024年6月7日

財務省ASEANワークショップ

ASEAN諸国の人口動態の現状と展望



拓殖大学国際学部

新田目夏実

naratame@gmail.com

発表アウトライン

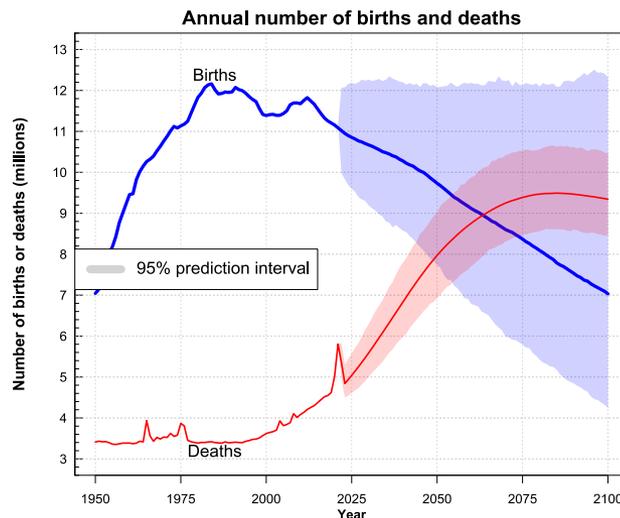
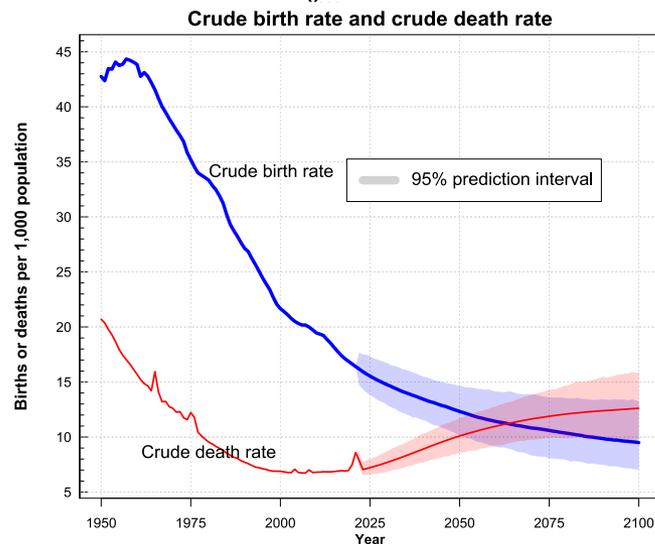
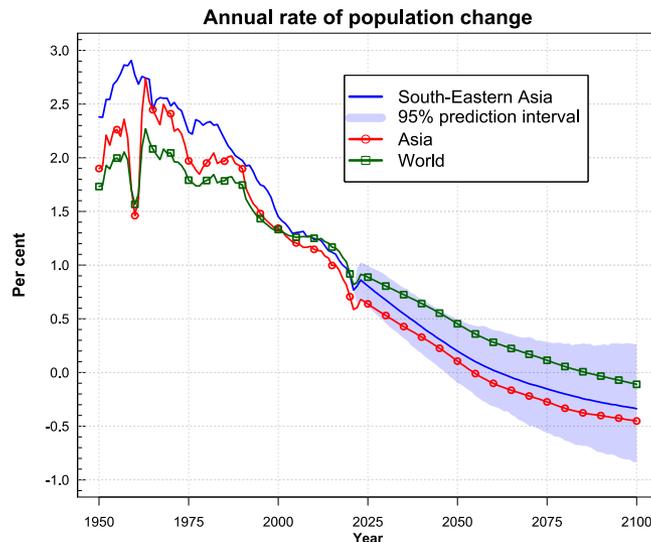
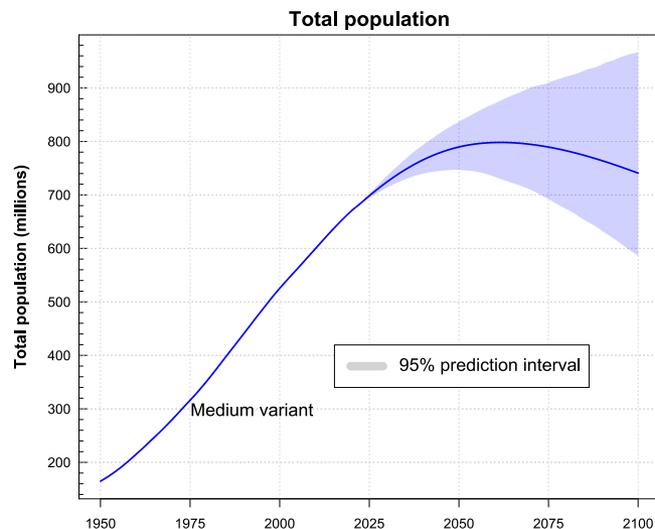
1. 東南アジアの人口動態—概況
2. 人口動態の基礎指標と分析フレームワーク
 - 2.1 死亡率の代表的指標と理論
 - 2.2 出生力の代表的指標と理論
 - 2.3 人口転換理論と高齢社会の到来
3. 死亡率転換と東南アジア
4. 出生力転換と東南アジア
5. 東南アジアの高齢化の進展
6. 労働力人口の減少と労働移動

1. 東南アジア(ASEAN)の人口動態一概況

- ▶ 東南アジアの人口は2060年代半ばにピークを向え、それ以降減少に転じると予想されている。
- ▶ 年平均人口増加率で見ると、1970年まで2.5%を越えていたが、その後一気に低下し、2025年以降1.0%を下回る。その背景にあるのが死亡率と出生率の急激な低下である。
- ▶ 粗死亡率(人口千人あたり死亡率)は戦後一気に減少する。粗出生率(人口千人あたり出生率)はいったん上昇し、その後急速に低下する。出生率と死亡率の差が非常に大きかったため、またこの変化が短期間に生じたために発生したのが、いわゆる「人口爆発」である。
- ▶ 実数で見ると、2060年代半ば以降、死亡数が出生数を上回り、それに伴い人口減少が始まる。

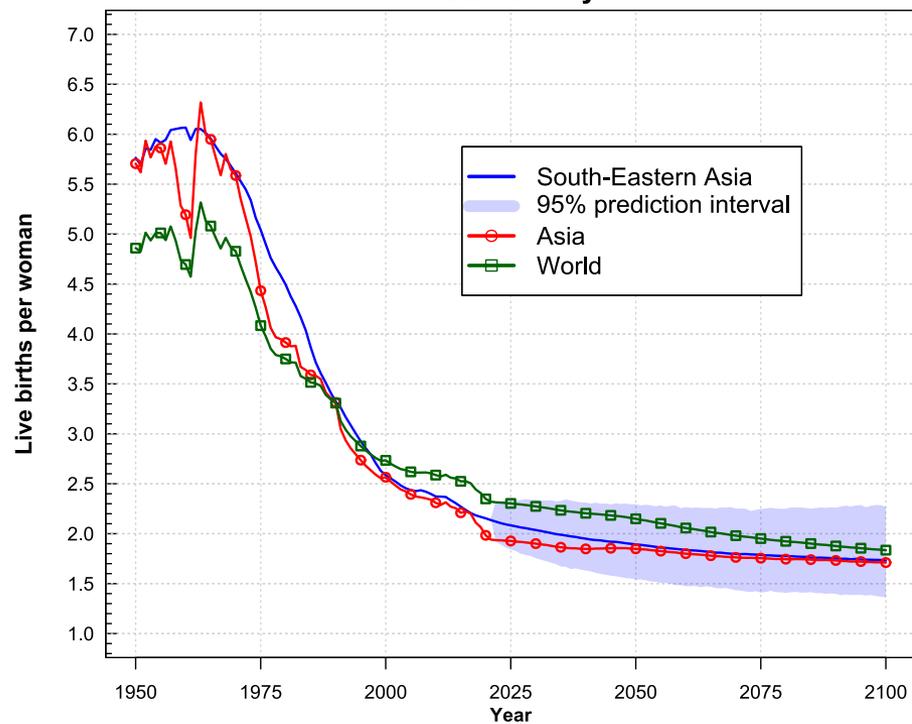
- ▶ 出生率についてより正確な指標である合計特殊出生率で見ると、1970年代半ばまで5.0を上回る水準にあったが、2000年には2.5近辺まで低下し、2020年代以降人口置換水準を下回る。
- ▶ 出生率の低下に伴い、高齢化が急速に進行している。1950年代後半には、高齢人口が若年人口(0-14歳)を上回るようになる。
- ▶ 人口ピラミッド(年齢構造)は、以上の出生率、死亡率の変化を反映するものであるが、加えて、過去の戦乱の有無・程度を反映している。その結果、国別にみると、かなり多様な形を示している。

東南アジアの人口動態－人口の増加と減少、出生と死亡

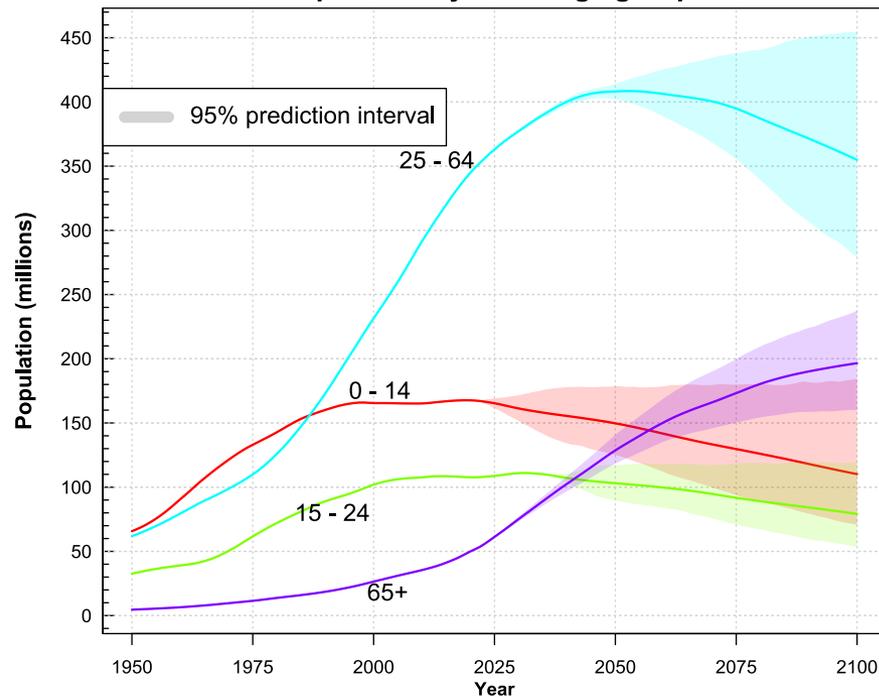


出生率の低下と高齢化

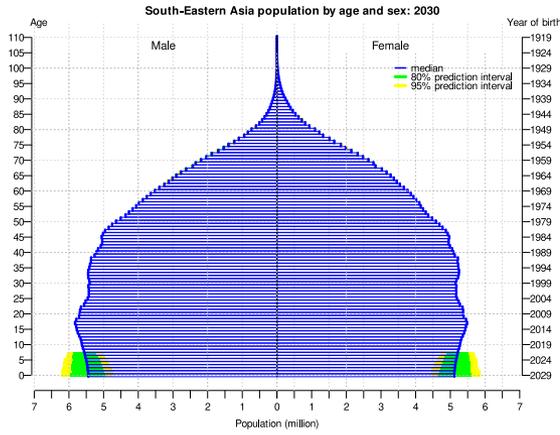
Total fertility



Population by broad age groups

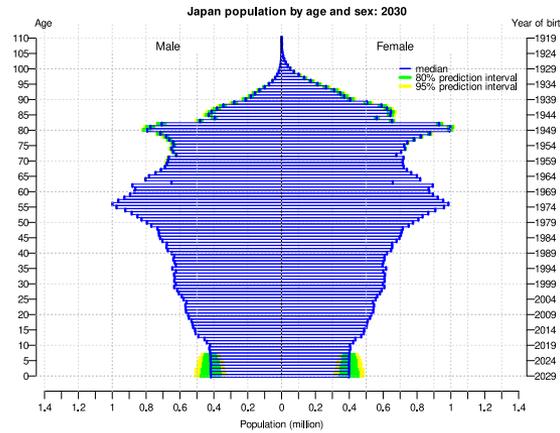


人口ピラミッドに見る地域性



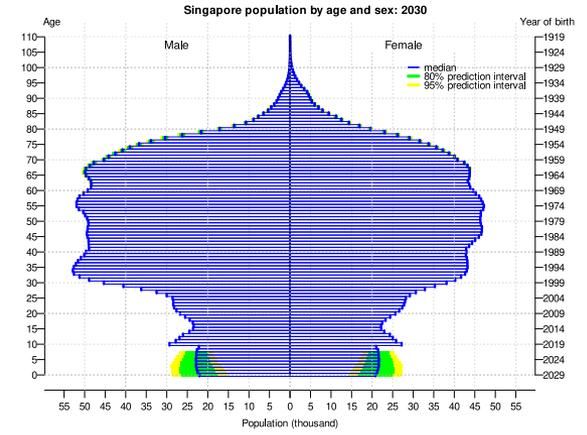
© 2022 United Nations, DESA, Population Division, Licensed under Creative Commons license CC BY 3.0 IGO. United Nations, DESA, Population Division, *World Population Prospects 2022*, <http://population.un.org/wpp/>

東南アジア



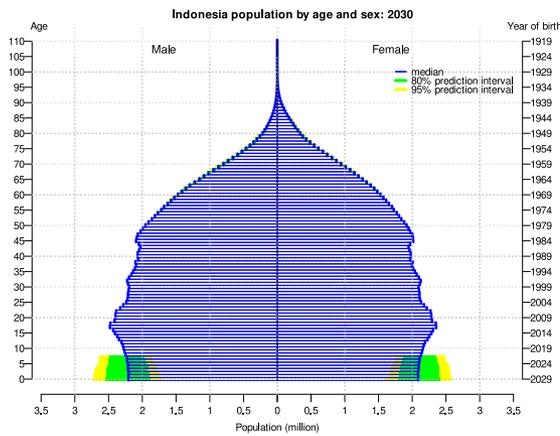
© 2022 United Nations, DESA, Population Division, Licensed under Creative Commons license CC BY 3.0 IGO. United Nations, DESA, Population Division, *World Population Prospects 2022*, <http://population.un.org/wpp/>

日本



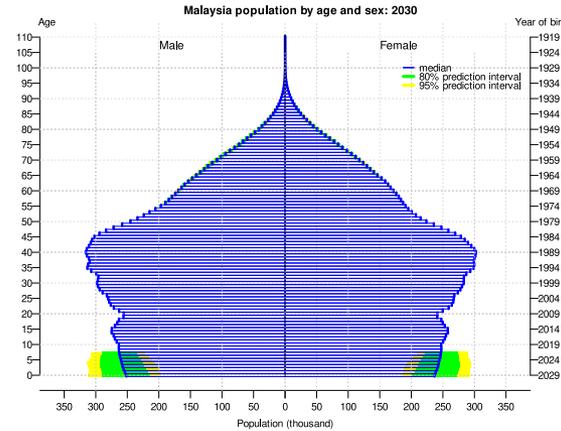
© 2022 United Nations, DESA, Population Division, Licensed under Creative Commons license CC BY 3.0 IGO. United Nations, DESA, Population Division, *World Population Prospects 2022*, <http://population.un.org/wpp/>

シンガポール



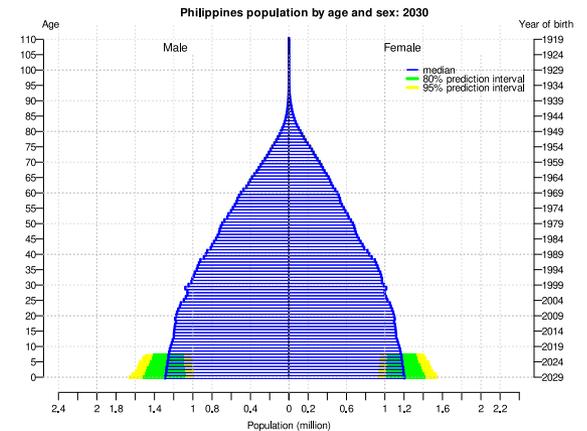
© 2022 United Nations, DESA, Population Division, Licensed under Creative Commons license CC BY 3.0 IGO. United Nations, DESA, Population Division, *World Population Prospects 2022*, <http://population.un.org/wpp/>

インドネシア



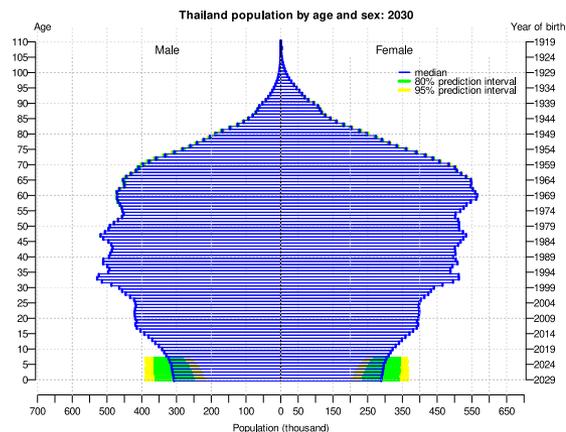
© 2022 United Nations, DESA, Population Division, Licensed under Creative Commons license CC BY 3.0 IGO. United Nations, DESA, Population Division, *World Population Prospects 2022*, <http://population.un.org/wpp/>

マレーシア



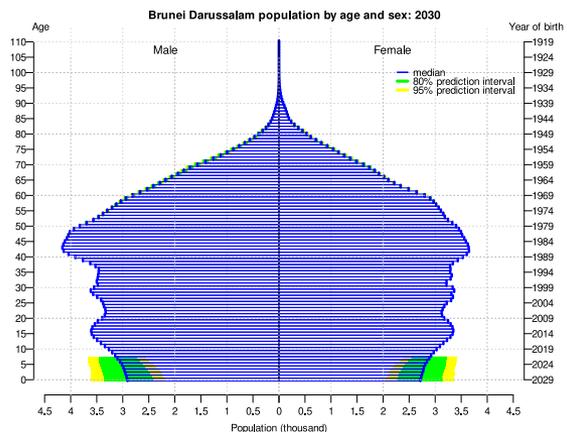
© 2022 United Nations, DESA, Population Division, Licensed under Creative Commons license CC BY 3.0 IGO. United Nations, DESA, Population Division, *World Population Prospects 2022*, <http://population.un.org/wpp/>

フィリピン



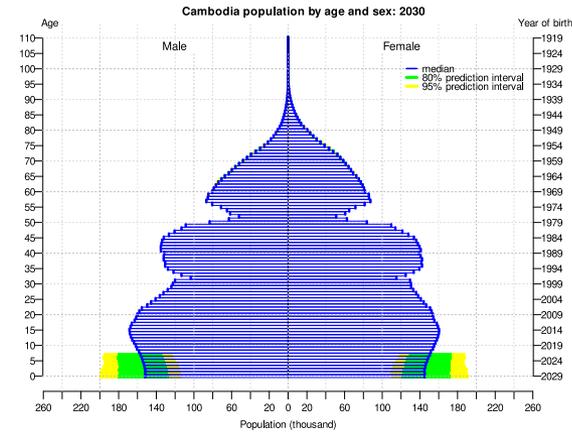
© 2022 United Nations, DESA, Population Division, Licensed under Creative Commons license CC BY 3.0 IGO, United Nations, DESA, Population Division, *World Population Prospects 2022*, <http://population.un.org/wpp/>

タイ



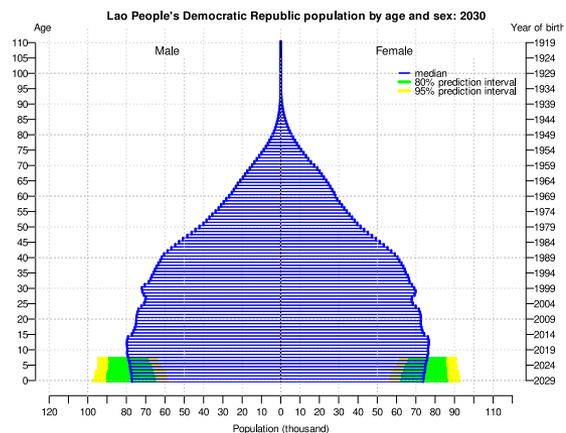
© 2022 United Nations, DESA, Population Division, Licensed under Creative Commons license CC BY 3.0 IGO, United Nations, DESA, Population Division, *World Population Prospects 2022*, <http://population.un.org/wpp/>

ブルネイ



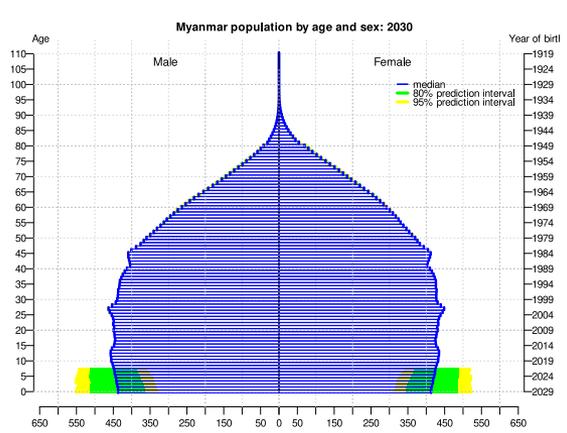
© 2022 United Nations, DESA, Population Division, Licensed under Creative Commons license CC BY 3.0 IGO, United Nations, DESA, Population Division, *World Population Prospects 2022*, <http://population.un.org/wpp/>

カンボジア



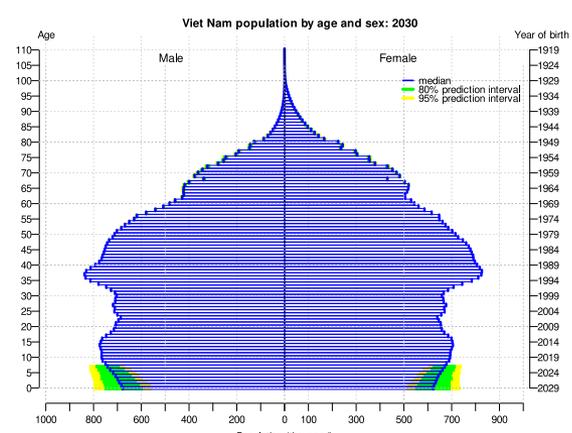
© 2022 United Nations, DESA, Population Division, Licensed under Creative Commons license CC BY 3.0 IGO, United Nations, DESA, Population Division, *World Population Prospects 2022*, <http://population.un.org/wpp/>

ラオス



© 2022 United Nations, DESA, Population Division, Licensed under Creative Commons license CC BY 3.0 IGO, United Nations, DESA, Population Division, *World Population Prospects 2022*, <http://population.un.org/wpp/>

ミャンマー



© 2022 United Nations, DESA, Population Division, Licensed under Creative Commons license CC BY 3.0 IGO, United Nations, DESA, Population Division, *World Population Prospects 2022*, <http://population.un.org/wpp/>

ベトナム

2. 人口動態の基礎指標と分析フレームワーク

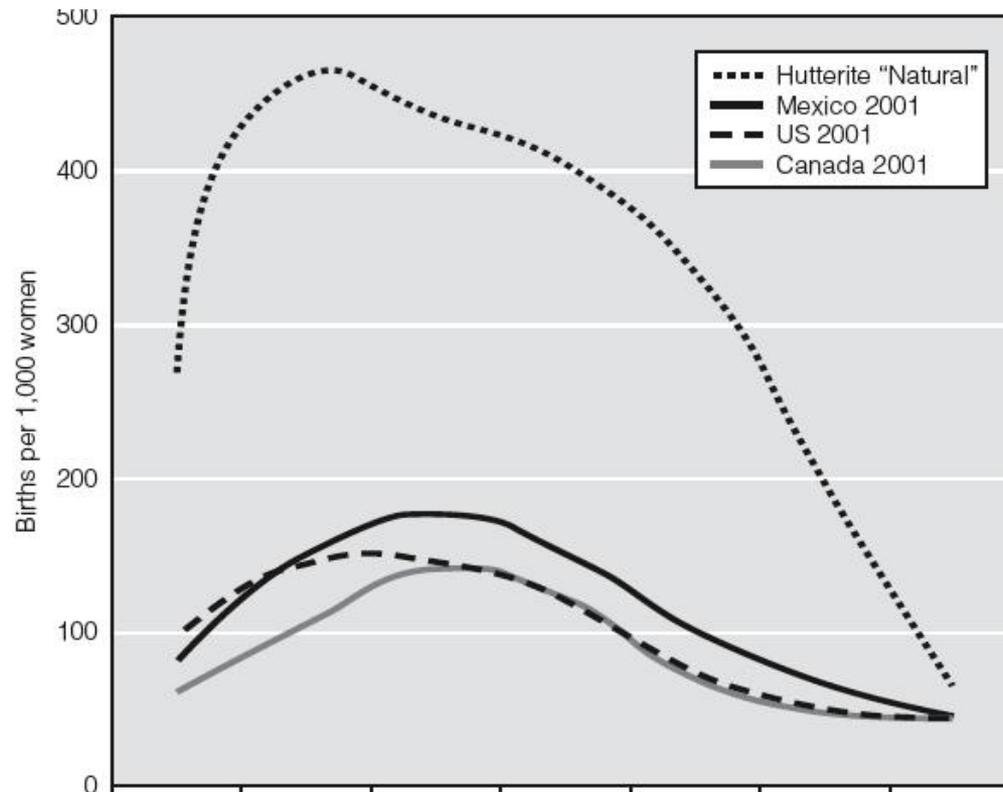
2.1 死亡力の代表的指標と理論

- ▶ 死亡力の指標及び理論としてよく用いられるものとして次のものが重要である。
 - 粗死亡率(人口千人あたり死亡率)
 - 年齢別死亡率
 - 乳児死亡率(出生数1,000に対する0歳児死亡数の比率)
 - (出生時)平均余命
- ▶ 死亡力転換 - 病気による若年期の死亡から高齢期における老化による死亡への移行
- ▶ 疫学的転換 - 発展とともに主要な死因が感染症から生活習慣病へ変化

2.2 出生力の代表的指標と理論

- ▶ 「生物学的」妊娠能力の指標—妊孕力、自然出生力、年齢別出生率、避妊実行率と母乳保育による産後不妊
- ▶ 出生率の主要指標—粗出生率(人口千人あたり出生率)、合計特殊出生率、人口置換水準
- ▶ 出生率の人口学的低下要因として重要なもの
 - 初婚年齢の上昇(晩婚化→「生涯」未婚率の上昇)
 - 有配偶出生率の低下
- ▶ その原因としてしばしば指摘されるものが、
 - 女性の進学率の上昇
 - 女性の社会進出
- ▶ 出生力転換—高い「自然出生力」から「計画された」低い出生力への移行

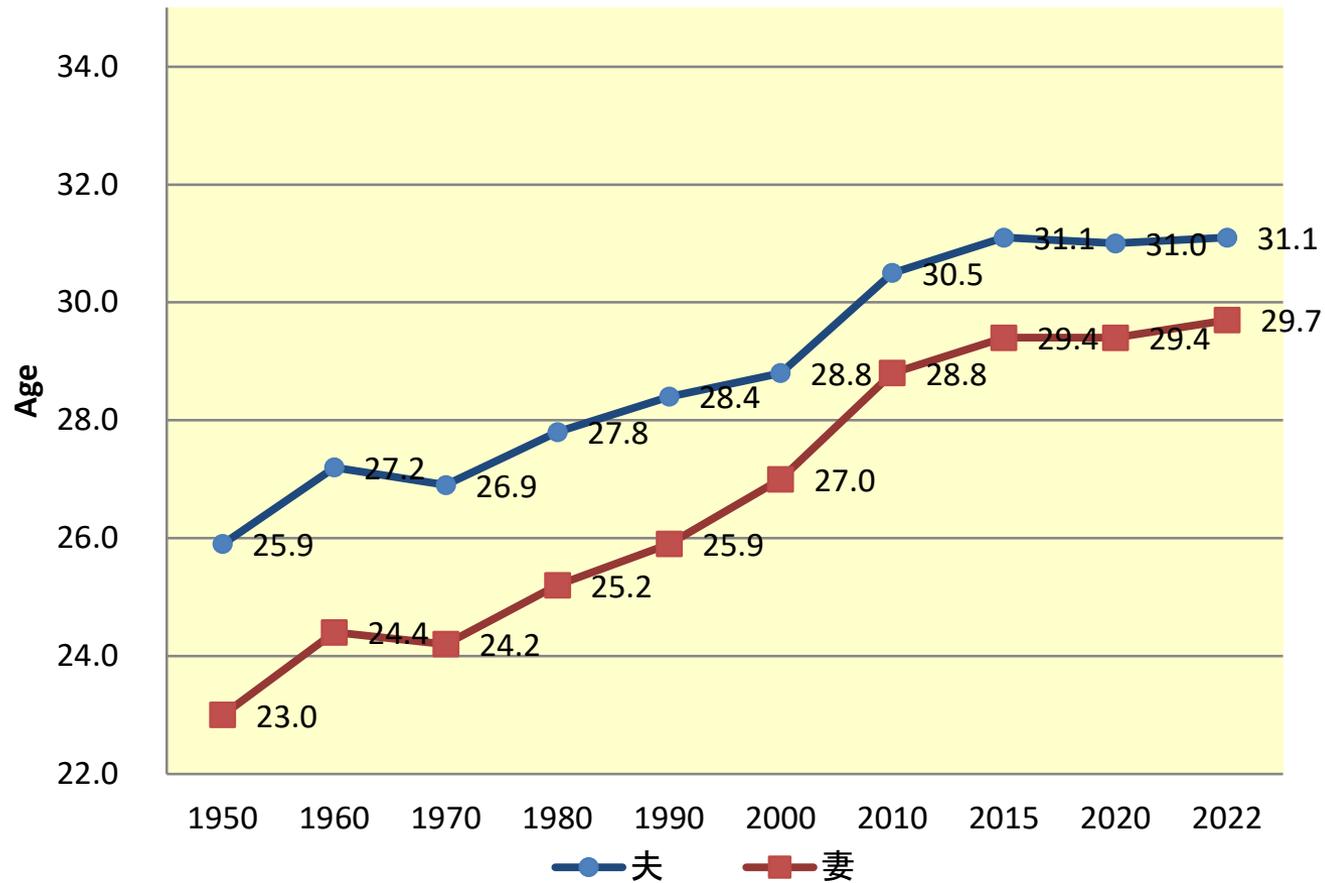
妊孕力と自然出生カーハテライト(Hutterite、フッター派)



	15-19	20-24	25-29	30-34	35-39	40-44	45-49
Hutterite "Natural"	250	460	431	396	321	167	24
Mexico 2001	44	117	147	120	66	26	4
US 2001	59	113	113	86	35	7	0
Canada 2001	22	69	108	87	30	5	0

ハテライトーカナダと米国国境に居住するキリスト教徒。厳格な宗教的生活、自給自足、避妊、離婚を禁止。非常に高い出生力を記録。

日本の初婚年齢



(資料) 国立社会保障・人口問題研究所『人口統計資料集2024』

2.3 人口転換理論と高齢社会の到来

▶ 二つの人口転換理論

1. 古典的人口転換－高出生・高死亡から低出生・低死亡状態への移行←欧米の経験にもとづく理論
 - ・ なお、途上国の人口転換は高い出生率状態の間に死亡率が短期間に急激に生じたため、「人口爆発」状態となった。
2. 第2の人口転換－人口置き換え水準を下回る低出生率状態の継続(理論というより現在進行形の様々な研究)

▶ 高齢化社会の諸問題

- 年齢構造転換－子どもが多数を占める年齢分布から若い労働力人口、そして高齢者中心の人口構造への移行
- 世帯構造の変化－世帯規模の縮小と高齢の単身・夫婦世帯の増加
- 介護問題、医療・福祉・年金政策

発展レベル別死因 (%)

2000	Global	\$1,035 or less (低所得国)	\$1,036 -4,085 (低中所得国)	\$4,086 -12,615 (高中所得国)	\$12,616 or more (高所得国)
I. 感染症・寄生虫症、妊産婦・周産期死亡、栄養不良	30.9	64.8	42.9	15.0	6.4
II. 非感染症)	59.6	26.5	46.9	74.5	85.8
III. けが(事故・損傷等)	9.5	8.7	10.2	10.5	7.7
2019	Global	\$1,026 or less	\$1,026 -3,995	\$3,996 -12,375	\$12,376 or more
I. 感染症・寄生虫症、妊産婦・周産期死亡、栄養不良	18.4	46.8	28.6	8.2	6.6
II. 非感染症	73.6	42.2	62.6	84.2	87.8
III. けが(事故・損傷等)	8.0	11.0	8.8	7.7	5.6

(出所) *Global Health Estimates 2019: Deaths by Cause, Age, Sex, by Country and by Region, 2000-2019*. Geneva, World Health Organization; 2020.

発展格差—一人当たりGDP

	1人あたり GDP(2019)	人口(2024)
フィリピン	3,414	119,106,225
インドネシア	4,151	279,798,049
タイ	7,629	71,885,799
マレーシア	11,132	34,671,896
シンガポール	66,070	6,052,710
ブルネイ	30,748	455,859
東チモール	1,583	1,379,884
ミャンマー	1,415	54,964,694
カンボジア	1,671	17,121,848
ラオス	2,599	7,736,681
ベトナム	3,491	99,497,680
日本	40,416	122,631,432

(出所)

United Nations, Department of Economic and Social Affairs, Population Division (2022). *World Population Prospects 2022*, Online Edition.

The World Bank, *World Bank Development Indicators*.

3. 死亡力転換と東南アジア

- ▶ 東南アジアの乳児死亡率(出生千対)は急速に低下、ただし日本より40年は「遅れて」いる。日本—56(1950)、東南アジア—54(1990)。
- ▶ 世銀「高中所得国」に属するタイ、マレーシアの乳児死亡率は2000年代に入り、目覚ましく改善しつつある。
- ▶ 経済発展とともに着実に「疫学的転換」が進行している。ベトナム(低中所得国)の発展が注目される。
- ▶ フィリピン、インドネシア、マレーシア、ベトナム等における生活習慣病(悪性新生物、心疾患、脳血管疾患等)による死亡者の多さは、先進国における疫学的転換とは違うプロセスを示唆している。
- ▶ 出生時平均余命の伸長が進んでいる。しかし、東チモール、ミャンマー、カンボジアは、依然として70歳に達していない。
- ▶ 参考
- ▶ 「疾病、傷害及び死因の統計分類」—
- ▶ International Statistical Classification of Diseases and Related Health Problems(ICD)
- ▶ <https://www.mhlw.go.jp/toukei/sippe/>

乳児死亡率

	東南アジア	フィリピン	インドネシア	タイ	マレーシア	シンガポール	ブルネイ
1950	158.9	103.4	189.1	139.3	116.6	94.6	125.3
1960	118.9	73.8	148.3	103.3	70.1	36.4	79.3
1970	93.9	61.9	114.6	73.1	43.7	21.6	39.2
1980	73.0	59.1	86.9	47.4	25.0	12.2	16.3
1990	53.9	44.4	63.1	30.1	14.1	6.3	10.6
2000	37.5	30.8	41.1	18.4	8.7	3.1	8.3
2010	26.4	26.3	27.6	11.6	6.9	2.2	7.8
2020	19.8	22.2	19.2	7.4	7.4	1.6	9.2
2024	17.8	20.8	17.1	6.7	5.5	1.6	9.3
	東チモール	ミャンマー	カンボジア	ラオス	ベトナム	日本	USA
1950	274.2	213.7	172.5	207.0	97.9	56.0	31.7
1960	244.3	159.3	149.5	184.4	68.4	30.5	26.4
1970	204.3	117.8	126.3	161.4	65.0	13.5	20.9
1980	203.3	98.0	115.8	137.7	48.6	7.3	12.7
1990	142.6	82.3	86.2	106.3	37.5	4.6	9.7
2000	77.0	65.9	79.9	76.6	22.9	3.3	7.2
2010	47.3	48.7	35.7	51.8	18.0	2.3	6.2
2020	34.2	34.6	21.6	35.5	16.5	1.8	5.5
2024	28.3	31.1	18.7	27.8	14.2	1.6	4.8

United Nations, Department of Economic and Social Affairs, Population Division (2022). *World Population Prospects 2022*, Online Edition.

主要な死因－感染症(2019)

	フィリピン	インドネシア	タイ	マレーシア	シンガポール	ブルネイ	東ティモール	ミャンマー	カンボジア	ラオス	ベトナム	日本
1人当たりGDP(2019)	3,414	4,151	7,629	11,132	66,070	30,748	1,583	1,415	1,671	2,599	3,491	40,416
	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
I 感染症	24.3	18.9	13.9	18.1	20.7	10.3	40.1	21.6	23.0	25.6	9.3	10.3
II 非感染症	69.7	76.3	76.6	73.4	75.0	84.7	53.1	71.1	67.7	65.3	81.4	84.8
III けが	6.0	4.7	9.5	8.4	4.3	5.0	6.9	7.3	9.2	9.0	9.3	4.9
(感染症内訳)												
感染症・寄生虫症	6.7	12.0	6.8	4.2	1.2	5.8	21.6	12.1	8.4	11.2	3.6	2.0
呼吸器系感染症	12.8	2.9	6.3	12.7	19.3	3.1	8.6	4.3	9.1	6.5	3.8	8.0
妊娠・出産・産褥期の疾患	0.3	0.3	0.0	0.1	0.0	0.1	0.8	0.4	0.5	0.5	0.1	0.0
胎児・新生児の疾患等	3.2	2.5	0.5	1.0	0.1	1.1	8.2	4.4	4.5	7.1	1.6	0.0
栄養不良	1.3	1.2	0.2	0.1	0.0	0.1	0.8	0.3	0.5	0.4	0.2	0.2

(注) 感染症－結核、性感染症、細菌性下痢を伴う疾病等

(出所) *Global Health Estimates 2019: Deaths by Cause, Age, Sex, by Country and by Region, 2019*. Geneva, World Health Organization; 2020.

主要な死因－非感染症(2019)

非感染症内訳	フィリピン	インドネシア	タイ	マレーシア	シンガポール	ブルネイ	東チモール	ミャンマー	カンボジア	ラオス	ベトナム	日本
悪性新生物	9.4	12.3	23.8	15.3	29.4	19.4	7.1	13.2	12.6	13.5	15.9	29.9
糖尿病	4.4	6.1	3.8	2.2	0.4	8.0	2.1	5.2	3.5	3.4	4.7	0.4
内分泌、血液、免疫異常	1.4	0.2	0.4	0.4	0.1	3.9	0.3	0.3	0.4	0.4	0.3	0.8
精神および行動の疾患	0.2	0.1	0.3	0.3	0.1	0.3	0.1	0.2	0.2	0.2	0.3	0.2
神経系の疾患、パーキンソン・アルツハイマー	0.8	2.1	5.7	3.0	0.8	5.6	1.6	1.9	2.0	1.6	4.9	6.4
心疾患、脳血管疾患等	34.1	38.4	23.1	34.4	31.1	30.1	26.4	30.8	28.1	28.8	39.5	26.9
呼吸器疾患	7.0	6.0	4.9	4.4	2.4	5.1	5.5	9.6	4.5	5.8	6.2	9.6
消化器系疾患	3.2	7.1	6.2	5.9	2.6	2.8	4.6	5.7	12.0	5.3	4.6	4.3
泌尿生殖器疾患	6.3	2.9	7.1	5.2	6.0	5.1	2.9	3.0	2.7	4.2	3.7	4.0
先天異常	1.1	0.8	0.4	0.8	0.3	1.7	1.9	1.0	1.3	1.5	1.0	0.2

出生時平均余命

	東南アジア	フィリピン	インドネシア	タイ	マレーシア	シンガポール	ブルネイ	東ティモール	ミャンマー	カンボジア	ラオス	ベトナム	日本
1950	42.4	53.4	39.4	47.0	43.2	50.7	50.0	29.0	35.4	38.9	38.7	49.2	59.2
1960	50.5	59.2	46.5	56.5	51.0	64.8	56.8	32.2	43.9	42.4	40.8	59.7	67.7
1970	54.8	61.7	53.0	63.1	57.7	68.8	64.1	37.2	50.7	39.1	43.6	56.2	72.0
1980	60.4	62.5	58.8	68.2	64.0	71.7	69.2	28.4	54.4	47.6	48.1	66.2	76.1
1990	64.6	65.9	63.2	71.3	70.4	74.9	71.7	45.0	56.7	55.4	53.7	69.2	79.0
2000	67.7	69.4	66.4	72.8	72.3	79.1	74.1	58.6	60.2	58.6	58.4	72.5	81.2
2010	70.3	70.8	68.7	74.4	76.1	81.7	74.8	65.3	63.3	67.7	64.0	73.5	82.9
2020	71.7	72.1	68.8	75.9	79.3	82.9	74.8	68.5	66.8	70.4	68.5	75.4	84.7
2024	73.2	72.4	71.2	76.6	80.1	84.4	74.6	69.6	67.7	71.6	69.5	74.9	85.1

United Nations, Department of Economic and Social Affairs, Population Division (2022). *World Population Prospects 2022*, Online Edition.

4. 出生力転換と東南アジア

- ▶ 急速な出生率の低下が生じている。
- ▶ シンガポールの合計特殊出生率は1970年代に、タイは1990年代に人口置換水準を下回っている。ベトナムも2000年代に入り、また、マレーシアも2020年代には人口置換水準を下回った。ミャンマーとインドネシアの少子化もいよいよ本格化しつつある。
- ▶ 20代後半における女性の有配偶率(25-29歳)の低下も著しい。1970年代まで多くの諸国の女子有配偶率は80%を越えていたが、現在25-29歳の平均値は、インドネシアでは55%、フィリピン、タイ、ミャンマーでは60%代まで低下した。
- ▶ マレーシア、シンガポール、ブルネイの平均出産年齢は30歳を上回っている。フィリピン、インドネシア、タイ、東チモール、ミャンマーの平均出産年齢も28歳を上回っている。
- ▶ これらの状況は、少子化がさらに加速することを予想させる結果である。

合計特殊出生率

	東南アジア	フィリピン	インドネシア	タイ	マレーシア	シンガポール	ブルネイ	東ティモール	ミャンマー	カンボジア	ラオス	ベトナム	日本
1950	5.76	7.45	5.19	6.34	6.37	6.25	6.86	6.61	5.95	6.63	6.25	5.18	3.66
1960	6.07	7.15	5.55	6.25	6.41	5.76	6.84	6.32	5.98	6.25	6.29	6.28	2.01
1970	5.61	6.20	5.45	5.55	5.03	3.07	5.72	5.66	5.75	5.72	6.31	6.02	2.09
1980	4.49	5.11	4.49	3.36	4.06	1.81	4.07	5.22	4.83	5.77	6.33	4.86	1.75
1990	3.32	4.35	3.10	2.09	3.37	1.79	3.29	5.81	3.54	5.64	6.08	3.60	1.52
2000	2.59	3.71	2.54	1.61	2.91	1.56	2.35	5.98	2.78	3.77	4.40	2.07	1.37
2010	2.37	3.26	2.45	1.58	2.14	1.16	1.94	4.85	2.35	2.77	3.15	1.89	1.39
2020	2.15	2.78	2.19	1.34	1.82	1.00	1.80	3.25	2.17	2.38	2.54	1.95	1.29
2024	2.09	2.67	2.12	1.31	1.76	1.05	1.74	2.88	2.09	2.26	2.37	1.93	1.33

United Nations, Department of Economic and Social Affairs, Population Division (2022). *World Population Prospects 2022*, Online Edition.

年齢別有配偶率と平均出産年齢

	東南アジア	フィリピン	インドネシア	タイ	マレーシア	シンガポール	ブルネイ	東ティモール	ミャンマー	カンボジア	ラオス	ベトナム	日本
有配偶率(25-29歳、女子)													
1970	82.6	77.0	83.3	79.3	86.7	76.2	90.1	80.6	78.7	86.6	82.5	79.2	80.3
1980	80.7	77.0	77.8	75.3	86.0	68.2	90.1	74.8	76.8	84.9	82.5	79.2	69.5
1990	79.3	76.0	72.2	71.2	85.3	60.2	90.1	68.4	74.2	83.3	82.5	79.2	58.7
2000	78.2	74.9	66.7	67.2	84.5	52.2	90.1	61.9	71.6	81.6	80.8	80.0	47.9
2010	76.9	73.3	61.2	64.7	83.8	44.2	83.7	56.0	69.0	80.0	77.1	80.8	37.1
2020	74.8	69.6	55.7	62.2	82.8	38.7	73.5	51.4	66.2	77.8	73.0	81.1	30.2
2024	73.7	68.0	54.4	61.2	81.9	38.2	68.9	50.5	65.1	76.5	71.2	80.9	29.6
平均出産年齢													
2024	28.4	28.6	28.6	28.4	31.1	32.1	30.6	29.3	28.9	27.3	26.7	27.5	31.6

United Nations, Department of Economic and Social Affairs, Population Division (2022). *World Population Prospects 2022*, Online Edition.

5. 東南アジアの高齢化の進展

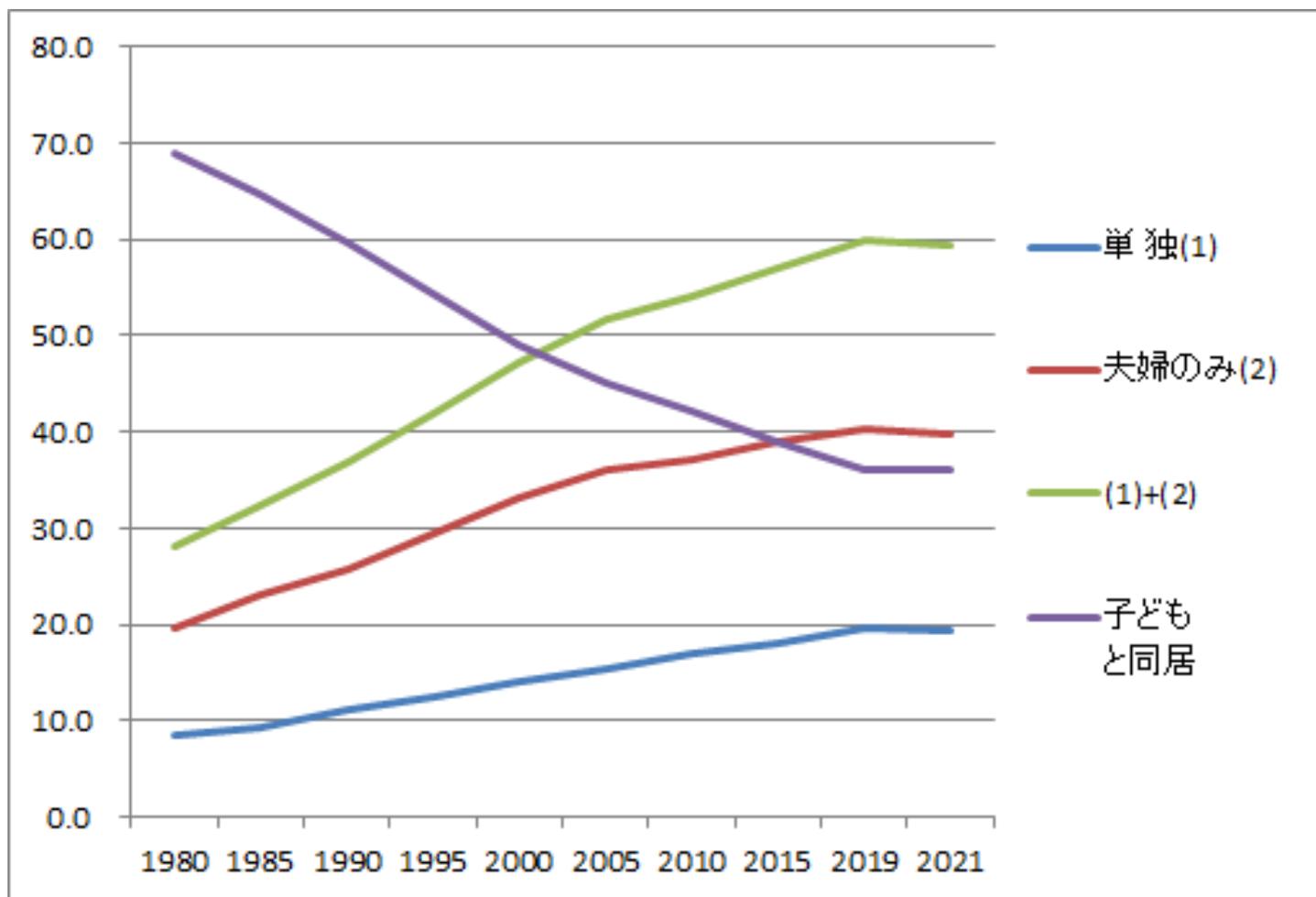
- ▶ 東南アジアは2010年以降、急速に高齢化が進展しつつある。
- ▶ タイとシンガポールは2010年に既に高齢化社会(高齢者率7%)となり、2020年以降高齢社会(高齢者率14%)になりつつある。
- ▶ 2020年以降、ベトナムの高齢化が急速に進んでいるが、それにインドネシア、マレーシアとミャンマーが加わりつつある。
- ▶ 高齢者の「住み方」を見ると、タイとベトナムにおいて、子どもと同居しない「高齢者世帯」の増加がみられる。
- ▶ 少子化と女性の社会進出に伴い、伝統的家族介護は今後困難になる。近い将来、高齢者の介護が深刻な問題になることが予想される。

高齢化率

	東南アジア	フィリピン	インドネシア	タイ	マレーシア	シンガポール	ブルネイ	東ティモール	ミャンマー	カンボジア	ラオス	ベトナム	日本
1950	2.80	3.56	1.74	3.21	4.91	2.29	4.83	3.14	3.21	2.67	2.13	4.13	4.89
1975	3.64	2.89	3.42	3.17	3.00	4.03	2.72	2.63	3.97	2.99	3.21	5.38	8.07
2000	5.04	3.77	5.01	6.10	4.10	6.32	2.86	3.10	4.94	3.06	3.55	6.20	17.80
2010	5.91	4.27	5.93	8.85	5.11	7.20	3.44	4.78	5.17	3.65	3.89	6.49	23.60
2020	7.46	5.22	6.71	13.85	7.01	13.15	5.47	5.37	6.45	5.27	4.28	8.43	29.58
2030	10.37	6.89	8.96	21.30	9.88	22.77	9.74	5.04	8.65	8.48	5.68	12.29	31.38
2040	13.41	8.80	12.05	27.36	12.99	29.76	15.33	5.87	11.11	10.96	7.43	15.86	35.22
2050	16.30	10.78	14.97	31.57	17.42	34.25	20.75	7.21	13.64	12.92	10.10	20.03	37.50
2060	18.86	13.24	16.92	34.94	22.67	37.44	24.29	10.36	15.91	16.81	13.92	24.03	38.29
2065	19.94	14.58	17.93	36.55	24.59	38.93	25.32	12.64	16.95	17.66	15.76	24.93	38.58

United Nations, Department of Economic and Social Affairs, Population Division (2022). *World Population Prospects 2022*, Online Edition.

参考 - 日本の高齢者世帯



(資料) 社会保障人口問題研究所『人口統計資料2024年版』

高齢者世帯のタイプ

国	調査日	平均 世帯員 数	(1)	(2)	(1)+(2)	子どもと 同居
			单身	夫婦	高齢者世 帯	
フィリピン	2000/1/7	4.55	6.67	12.87	19.54	74.54
フィリピン	2010/1/7	4.26	8.39	12.95	21.34	73.06
フィリピン	2013/9/13	4.50	6.74	11.19	17.93	74.08
フィリピン	2017/9/17	4.01	9.77	14.34	24.11	72.44
インドネシア	2000/1/7	3.85	8.57	18.29	26.86	71.07
インドネシア	2007/9/18	4.05	9.47	16.88	26.35	71.77
インドネシア	2012/6/30	4.10	9.80	16.15	25.95	71.63
インドネシア	2017/8/15	3.88	10.39	16.31	26.70	71.77
タイ	2000/1/7	4.14	6.41	12.30	18.71	79.17
タイ	2005/1/7	3.91	7.69	13.75	21.44	77.30
タイ	2015/1/7	3.57	10.30	17.10	27.40	71.03
タイ	2019/1/7	3.21	12.54	21.50	34.04	65.22
マレーシア	1991/1/7	5.02	8.13	10.44	18.57	75.65
マレーシア	2000/1/7	4.57	8.33	13.75	22.08	74.76

国	調査日	平均世帯員数	(1) 単身	(2) 夫婦	(1)+(2) 高齢者世帯	子どもと同居
ミャンマー	2014/1/7	4.85	5.08	7.07	12.15	82.32
ミャンマー	2016/3/22	4.53	5.68	8.47	14.15	84.23
ラオス	2000/1/7	6.65	0.98	3.26	4.24	93.08
ラオス	2006/1/7	6.27	1.52	3.56	5.08	84.44
ラオス	2011/1/7	5.75	2.44	5.88	8.32	91.43
ラオス	2017/1/7	5.14	3.80	7.82	11.62	87.87
カンボジア	2000/4/16	5.18	3.76	7.04	10.80	87.46
カンボジア	2005/7/12	4.98	4.96	7.65	12.61	84.86
カンボジア	2010/10/21	4.96	4.42	6.07	10.49	87.53
カンボジア	2014/1/9	4.78	5.06	9.17	14.23	84.57
ベトナム	2002/6/11	4.53	7.02	14.35	21.37	78.00
ベトナム	2005/10/30	4.33	7.01	13.55	20.56	78.45
ベトナム	2010/1/7	3.99	8.99	18.05	27.04	72.11
ベトナム	2020/1/7	3.61	11.16	24.14	35.30	64.00

6. 労働力人口の減少と労働移動

- ▶ 急速な少子化・高齢化に伴い、新規労働力の供給が困難となる時期を迎えつつある。
- ▶ タイとシンガポールは、2025年から20-64歳人口の減少が始まる。
- ▶ ベトナムの20-64歳人口の減少は2045年以降に、マレーシアとミャンマーについては2050年以降に始まる。
- ▶ その他の国については、20-64歳人口(実際の労働力人口)の減少はさらに先のことになるが、毎年の新規労働力の供給余力は確実に減少していくことが予想される。

将来人口(千人) 20-64歳

	東南アジア	フィリピン	インドネシア	タイ	マレーシア	シンガポール	ブルネイ	東ティモール	ミャンマー	カンボジア	ラオス	ベトナム
2000	279,941	37,567	115,884	38,559	12,101	2,750	178	384	23,994	5,465	2,341	40,719
2010	344,291	48,255	140,138	44,042	16,387	3,669	244	468	28,192	7,618	3,079	52,199
2020	398,669	60,948	161,631	45,881	20,422	4,144	283	608	31,934	9,239	3,987	59,591
2025	416,414	66,893	169,274	44,752	21,811	4,036	295	707	33,497	9,761	4,400	60,987
2030	432,100	72,830	176,492	43,184	22,852	3,893	302	798	34,648	10,305	4,792	62,005
2035	445,409	78,258	182,360	41,537	23,737	3,751	306	877	35,413	10,830	5,156	63,185
2040	454,320	83,292	185,580	39,772	24,474	3,624	305	953	35,998	11,355	5,503	63,463
2045	459,136	87,957	186,846	37,873	24,875	3,476	298	1,028	36,263	11,907	5,783	62,830
2050	459,879	92,187	186,960	35,758	24,757	3,335	288	1,093	36,162	11,945	5,967	61,426
2055	459,196	95,669	187,386	33,766	24,305	3,195	278	1,138	35,906	11,892	6,054	59,607
2060	456,366	98,158	187,395	31,637	23,749	3,024	271	1,165	35,456	11,873	6,085	57,555

- ▶ シンガポール、マレーシア、タイは、既に、東南アジア域内の余剰労働力の主要な目的地である。例えば、多数のインドネシア人、フィリピン人、ミャンマー人がマレーシアで働いている。また、ミャンマー人、ラオス人、カンボジア人がタイで働いている。ベトナム人労働者は、日本に加え、台湾、韓国でも多数就労している。
- ▶ フィリピン人の主要海外就労先は、実際には中東であった。歴史的理由でアメリカに移住するものも多い。メイドとして香港で働くものも多い。
- ▶ 近い将来、ベトナムも東南アジア域内の余剰労働力の目的地に転ずることが予想される。日本はこれらの国にとって、就労先の一つに過ぎないことに注意する必要がある。

ASEAN域内の労働移民

Origin	Indonesia	Nepal	Bangladesh	India	Lao PDR	Pakistan	Philippines	Thailand	Viet Nam	Sri Lanka	Myanmar	Cambodia	Total
Destination	2023	2022/23	2023	2023	2022	2023	2023	2023	2023	2022	2023(e)	2022	Total
Singapore	7,898	220	53,265	87	179,847	3,690	1,355	1,178	19,640	47	267,180
Malaysia	72,260	219,357	351,683	15,319	...	20,905	30,720	8,369	480	266	48,654	0	768,013
Thailand	...	29	...	4	51,652	36	98,664	18,417	150,385
Brunei Darussalam	2,872	862	1,081	146	...	581	5,542
Total 2023	83,030	220,468	406,029	15,323		21,138	210,567	12,640	1,835	...	166,958		1,191,120
Total 2022	50,300	26,576	116,323	12,839	51,652	6,472	89,828	7,919	...	1,480	161,941	18,464	525,330

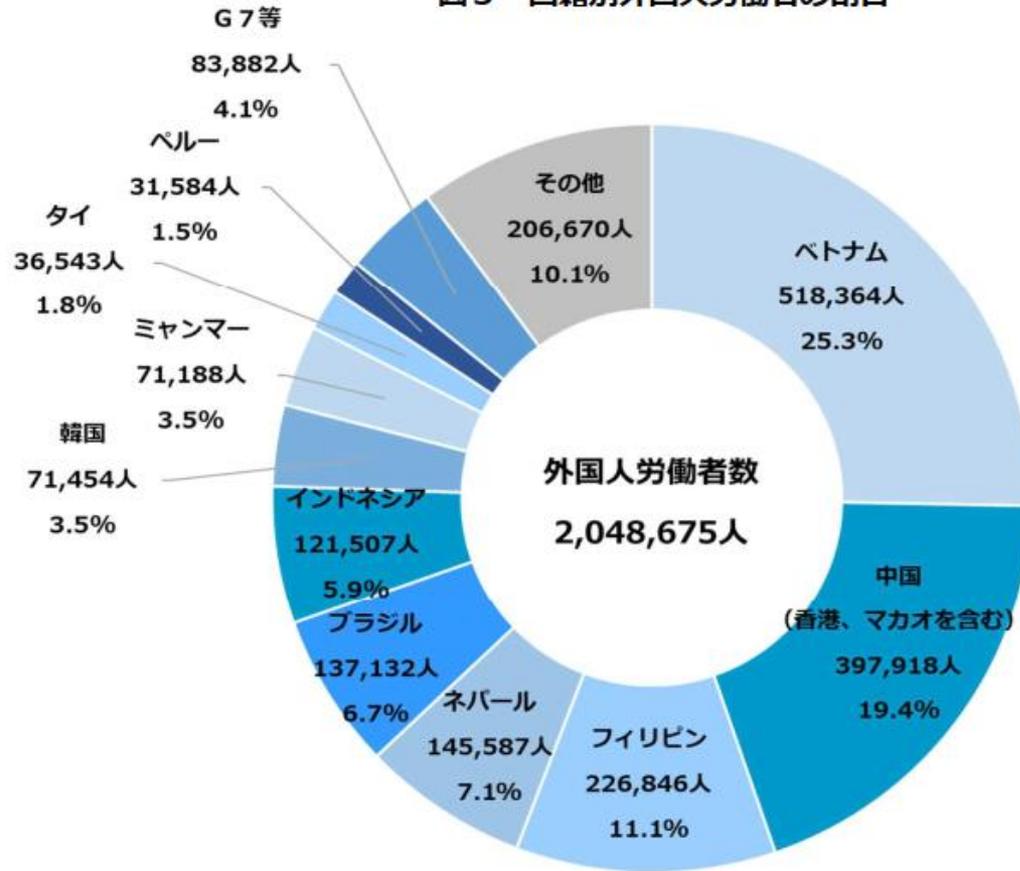
... = data not available, ASEAN = Association of Southeast Asian Nations, Lao PDR = Lao People's Democratic Republic.

Note: 2023 data for Myanmar are estimated based on the first semester figures.

ADB, ILO and OECD, *Labor Migration in Asia: Trends, Skills, Certification, and Seasonal Work*, 2024.

- ▶ 「外国人雇用状況」届け出によると、日本の外国人労働者は、南米系外国人を除くと、ベトナム、中国、フィリピンに加えネパール、インドネシア、ミャンマー等、近隣アジア諸国からの就労者が多い。
- ▶ しかし、東南アジア域内の少子化と労働力の取り合いの結果、近い将来ベトナム等からの労働力獲得が困難になることも考えられる(なお、ネパール人の最大の就労先はインドである)。
- ▶ この結果、ミャンマーに加え、ラオス、カンボジアや、さらにはパキスタン、バングラデシュ等、南アジアの労働力に目を転じる必要性も予想される。
- ▶ ご清聴ありがとうございました。

図3 国籍別外国人労働者の割合



(出所)厚生労働省、「外国人雇用状況」の届出状況まとめ、2023年10月。